

# Face to face

## 詩川椎菜

一

いつだったか、誰から言われたのかも忘れてしまったが、夢よりもきちんと現実と向き合え、と諭されたことがあった。確か、双子の兄と比べられて、そう言われたような記憶がある。僕と同じ顔の、僕より遥かに優秀で気難しい兄の姿が、はつきりと脳裏に浮かんだ。

僕だって、僕なりに現実と向かい合っているのに。多少、兄よりも気が弱いし、空想癖はあるかもしれないけれど、僕は現実から逃げたりはしない。たと

え、どんなに信じがたい出来事を目の前にしたとしても……ちやうど、今、この瞬間のように。

僕は今、彼女、すなわち恋人の家の玄関にいる。彼女の家は、一人暮らし向けマンションの一室で、いつ来てもラベンダーの香りを纏っていた。しかし、彼女が持つ『品のよさ』を象徴するその香りだが、今日に限っては少しばかり濃く、甘ったるく感じる。いや、正直に言えば、そんなことを考えている場合ではない。危ないところで、僕は現実逃避をしうになっていた。大事なのは彼女のこと、彼女の顔のことだ。

このちょっとした事件は、訪ねてきた僕の入室を、彼女が頑なに拒んだところから始まる。

「顔を見せたくないの」

僕がインターホンを鳴らした直後、慌てたような彼女の呟きと、ドアチェーンをガチャガチャと掛ける音が聞こえた。「どうして？」と単純すぎる問いを發すると、「どうしても」と、返ってくる。

「顔なんて、減るものじゃあるまいし」

僕はそう言つて、何かが彼女の機嫌を損ねているのか、それとも単に、化粧でも失敗したのかな、と考えを巡らせていた。でも、チェーンの音が止んだ代わりに届いたのは、あまりにも意外すぎる答えだった。

「減るものだよ」

「……………?」

「減るよ、顔」

「……ワンモアセイ」

「見られると減るの、顔が」

僕の口から、言葉には表しがたい声が漏れた。自分自身が、ひどく間抜けな生き物になったように感じた。

彼女が言っているのは、一体どういうことだ？ 耳から伝わった信号が、大脳に受け入れを全面拒否されていた。僕は、灰色の脳細胞……とはとても言えない矮小な脳をこねくり回し、全てはジョークである、という結論に達した。だが、僕がその結論を伝えるより早く、彼女は、いつそう真剣な声で言うのである。

「冗談じゃないから」

いくら彼女のが大好きでも、この言い分を鵜呑みにできるはずがない。こんな真剣な態度で、例えば「愛してる」なんて言われたら、それは嬉しくて仕方がないはずだ。だが、彼女の言葉は「顔が減る」だ。あまりにも絶望的である。何としても、彼

女の口から、冗談だと言わせなければ。一度、信じた演技をしてみるというのも手だろうか、と思ひ、僕は彼女に尋ねた。

「見られる度に減ってたら、もう、顔全部ないんじゃない？」

「うん」

当たり前じゃん、とでも言いたげな、呆れを滲ませた口調……このままでは埒があかない。僕は、思い切ってドアを開けてみる。すると、実のところ鍵もチェーンも掛かっておらず、あっさりと入室できたと同時に、前方に大きくよろめいてしまった。気を取り直し、顔を上げて彼女を見つめ、そして。

僕は、全くもって非現実的なその光景に、直面することとなった。

「ねえ、顔、なくしてみたよ」

そう呟いた彼女の顔は、所謂のつぺらぼうのそれであった。

こんな経緯で、僕は今、顔をなくした彼女と対峙する羽目になっている。しばらくの沈黙の後、彼女は心配そうに言った。

「何で黙ってるの。私のこと、嫌いになった？」

「……そんなこと」

「じゃあ、笑ってよ。いつもみたいに」

そう言われて、僕ははつとした。確かに、僕の表情は強張っているし、ここに来てから一度も、笑うことはなかった。彼女は何かを探すように腕をふらふらさせると、僕の頬に手を当てて——というよりも、偶然当たった、という様子で、無理やり口角を上げようとしてくる。のつぺらぼうの彼女には当然目もないので、周りが見えないのかもしれない。じゃあ、口もないのに、どうやって喋っているっていうんだ？

「笑ってよ、ねえ」

「……………」

体格も、髪形も、声も匂いも、纏っている雰囲気も、以前と全く変わらない彼女だ。彼女は、泣きそうだった。目も口も鼻も眉毛も、何もないにも関わらず、泣きそうに見えた。大好きな彼女が悲しんでいるのに、僕はどうしても、慰めようとしてあげないんだろう？

「……笑えないんだ」

「どうして……？」

意志に反して、言葉が零れていく。彼女を悲しませてしまう、感情の籠らない声が僕の口から溢れ、二人の周りに満ちていく。

「笑えないよ。笑えるわけない。だって」

君に、顔がないから。

僕は君を、僕が彼女と呼んでいる人とは、認められないから。

「……機嫌悪いの？」

のっぺらぼうは、彼女の声で尋ねてきた。ひどく頭痛がする。僕は答えを返さず、片手で頭を押さえながら、入ってきた玄関のドアに手を掛けた。

「行かないでよ」

彼女の声が身体中に反響する。まるで、小さくなった彼女が心臓の中に居て、そこから大声で叫んでいるみたいだ。僕は、それを断ち切るように外へと飛び出し、後ろ手にドアを閉めた。その瞬間、何を言っているのかは分からなかったが、僕の兄さんの声が聞こえた。頭痛は続いている。それから、「なんだ、ここに居たんだ」という彼女の声が、ずっとずっと遠くから届いた。

ふと気付くと、目の前にもまたドアがある。後ろには、今しがた閉めたばかりのドア。二つのドアは形も色も大きさも同じで、前方のドアには一か所だけ、上の方に小さな傷がついていた。混乱して自棄になった僕は、ぐわんぐわんと脳を揺らす頭痛に耐えな

がら、前方のドアを開ける。その瞬間、彼女の叫び声が耳をつんざいた。

「このストーリーカー野郎！ 死んじゃえ！」

部屋の中から出てきたのは、兄さんの恋人だった。もちろん、顔のパーツはきちんと揃っていて、僕の彼女と背丈や服装、声までもがよく似ている。でも、全くの別人。

わけも分からず呆然としていっていると、何やら黒光りする影が、僕の目の前を通り過ぎ、何も見えなくなつた。頭痛も消えた。ただ、音だけが聞こえる。ドアが閉じる音、開く音、知らない人の悲鳴。

「くくく、首、首が」

首？ そういえば、頭が妙に軽い。頭痛が治つてすつきりしたとか、そういう次元の軽さではなくて、頭が丸ごとなくなっているような……。自分の置かれていた状況を理解すると、だんだんと意識が薄れていく。暗闇に沈む間際、僕は思った。

「どうしよう……格好悪いや。彼女に『合わせる顔がない』なあ」

二

一体どのくらい前からか、あなたは夢と現実の区別が付いていない、自分の病氣と向き合いなさい、と言われるようになった。だけど、彼らは私を「ビョウキだ」と決めつけたいだけなんだと思う。だって、私の好きな人には双子の弟がいるけれど、私は、見た目のそっくりな二人の区別をちゃんと付けられる。それと比べれば、夢と現実の違いなんて、もっと簡単に分かるはずだ。私は普通の人間だし、何種類もの薬なんて、本当は全く必要なかった。

そう思っていたのに、今、私の身には、大変なことが起こっている。私の顔が、じわじわと消えてき

ているなんて、とても信じられない……いや、思い当たる節が、あると言えはあるけれど。

あの人は、いつだって私のために、私の悪いところを直してくれた。掃除だってできるようになったし、あの人が好きな料理も、今なら全部作れる。それでも、まだまだ足りないみたいで、つい何日か前、ひどく怒鳴られた。私は記憶力が悪いから（それも、あの人のために直さなくちゃいけない欠点だ）何を言われたか、よく覚えていなかった。ただ、最後に確か、言われたはずだ。「お前の顔なんか見たくない」と。

それ以来、あの人が見たくないなら、こんな顔なんて要らないと思いながら毎日寝るようになった。その念が何かに通じて、私の顔は消えかけているのかもしれない。鏡に映った顔には、右目と右の眉だけが残っている。数分前までは鼻も付いていた気が

するけれど、あつという間に跡形もなくなってしまった。

願いが叶って嬉しい、と喜ぶべきとは言え、あまりにも突然すぎて、今のところ驚きの方が勝っている。何の神様が妖精か分からないけど、明日の何時頃に顔を消しますから準備して下さい、とか、一言ぐらい言ってくれば良かったのに。

そんな風に考えながら、私はひたすら、右の眉が薄くなっていくのを眺めていた。だが、半分まで消えたところで、大変なことを思い出した。あろうことか今日は、あの人が私の家に来る日だった。

時計を見ると、あの人が来る時間まで、あと五分足らずだ。どんどん心拍数が上がり、呼吸が乱れるのを感じる。服装はおかしくない？ 部屋は綺麗にしてある。昼食も用意できる。メイクは……ああ、

顔がないんだった。もう少しで、最後の右目もなくなりそうだ。

ところで、あの人の望み通り、私の顔がなくなつたとして。あの人は、急なことで驚きはしないだろうか？ 今あの人と会うのは、あまり良くないような気がしてきた。ちゃんと説明して、それから会わなくてはならない。

しかし、計画を練るより早くインターホンが鳴つて、あの人の呼ぶ声が聞こえてきた。慌てて玄関に向かい、ドアチェーンを掛けようと手にしたところで、私の視界は暗転する。きつと、ついに右目がなくなつたのに違いない……私は、ドアの外にいるはずの人に向けて、言った。

「顔を見せたくないの」

「どうして？」

よく考えてみれば、口もないのに喋れるとは、ちよつとした奇跡のように思えた。意志疎通ができる

ことに感謝しつつ、「どうしても」と問いを突っぱねる。

だけど、その意思疎通も、すぐに上手くいかなかった。あの人とドア越しに会話をしていると、自分が何を言っているのか、あの人がどう答えているのか、分からなくなってくる。

「

「

何故だか、頭がごちゃごちゃになって、たった一瞬前のことさえ思い出せなくなる。私は、こんなに馬鹿だったのだろうか。あの人が怒るのも当然だ。仕方ない。運命なんだ。

「

「

私は馬鹿だけど、病気じゃない。あなたは優秀だから、その言葉で私を正して下さい。だから……と、そこまで考えたところで、意識がはつきりと呼び覚

まされる。ドアが開く音と、見えなくても分かる気配とで、あの人が玄関に入ってきたのが分かった。そして、ああ、あの人が息を飲んだ。やはり、驚かせてしまったのだろう。それでも、これはあの人が望んだこと。だから、私は囁いた。

「ねえ、顔、なくしてみたよ」と。

私の顔がなくなったのは、あの人のためだった。それなのに、あの人は何も言わない。沈黙は棘のようで、とても痛い。あの人が黙るのは、どんなときだっただろう？ 怒っているときは、喉が哽れるまで叫び続けるから、違う。楽しそうにしているときは、声を出して笑うから、違う。黙っているとき、あの人は……？

「」

「」

あの人が、何か大切なことを言っている。私が勝手に、何かを喋る。口を挟むなんて、許されないのに。自然と手が伸びて、あの人の顔に触れる。冷たい、無機質な金属のようだ。私は、何をしているのだろうか？ それと、思い出した。あの人の沈黙は、嫌悪。吐き気がするほどの、嫌悪感なんだ、あれ、なんで、どうして？

「君には、顔がないから」

混沌とした、理解できない言葉の渦、真つ黒な渦の中から、その一言だけが浮かび上がってくる。一言は、あまりにも冷たかった。怒られるより、無視されるより、何よりも怖いものだった。

あの人が、遠ざかっていくのを感じる。あの人の望み通りにしたつもりだったのに、私は駄目な存在だ。「行かないで」と、顔のない私が縋るように叫んでも、きつとそれは無駄だった。目がなければ、あの人の姿が見えない。鼻がなければ、あの人の匂



いが分からない。口がなければ、私の気持ちは伝わらない。強く、そう思った。

そして、そう思ったときには既に、私は目が見えるようになっていた。顔を触ると、きちんとパーツが揃っている。

「……た、す……て」

背後から、掠れた声が聞こえた。私の大好きな人が、そこに居る！

「なんだ、ここに居たんだ」

出て行ってしまったと思ったのは、気のせいだったのだ。この安堵感は、凄まじいものだ。やはり、私は顔で、彼の存在を確認しなければいけない。

そのとき、この感傷的な気分、水を差す邪魔者がやって来た。鍵を閉めないでいたドアから、私のストーカー、すなわち彼の双子の弟が入ってこようとしていた。見た目は兄にそっくりなのに、性格は陰湿極まりなく、頭がおかしくて、私のことを恋人

だと思い込んでいるらしい。だけど、このストーカーには、右目の下に小さな傷がある。それさえ分かれば、兄弟は簡単に見分けられた。

「このストーカー野郎！ 死んじゃえ！」

おどおどして気持ち悪い『弟』にそう怒鳴ると、私はその場にあつた箒を持って、奴の首筋に叩き付けた。でも、この箒はなんだか変だ。重いし、錆の臭いがするし、叩き付けたら妙な音を立てた……が、奴を怯ませて追い出せたから、それでよしとしよう。私は即座にドアを閉め、厳重に鍵とチェーンを掛けた。ほぼ同時に、恐らく『弟』が後ろにひっくり返って転んだのだろう、重いものが地面に打ち付けられる音がした。自業自得だ、ざまあみろ。

「」

なんだろう。あの人が、大事なことを言っている。けれど私は、理解できない。